もしかしたら、この二人の歴史的人物も渥美窯の焼き物を使っていたのかもしれないと、想像が膨らみます。

渥美窯の製品は当時の政治、経済、文化の中心地に運ばれていました。現在では、北は青森県、南は鹿児島県でも見つかっており、全国各地に流通していたと考えられています。

・渥美半島は伊勢神宮領が多いため、神宮関連の経済、技術的な支援、また国司を通じての技術的な後押しがあった

このようなことが、理由として考えられますが、これだけでは満足な説明とはいえません。

少なくとも、渥美窯は高度な知識と技術、芸術性を兼ね備えた職人たちの情熱に支えられていたことは間違いありません。

職人の技術と情熱と受け継がれる精神

畑の邪魔物とされていた渥美窯の焼き物たち。しかし、そのかけら一つひとつに、当時の職人たちのたゆまない努力と研さんの跡が刻まれています。さらに歴史をひもといていくと、渥美の焼き物は当時の歴史とともに歩んでいたことが分かります。

なぜ、渥美窯が営まれ、隆盛を極めたか。この大きな問題に答えるのは、たやすいことではありません。

・海に囲まれた海上交通の要所で、製品の運送に有利な場所であった

農業産出額が日本一を誇る現在の田原市。かつて、渥美窯という名を日本中に轟かせた職人たちの確かな技術、新たなことに挑み続ける精神は、形は変われど、これからも次の世代へと引き継がれていくことでしょう。

東大寺の瓦も焼いた渥美窯

●東大寺丸瓦

１１８０年、平氏によって東大寺が焼失した後、その再建に使われる瓦が国指定史跡『伊良湖東大寺瓦窯跡（伊良湖町／初立池横）』で焼かれました。この東大寺の大仏殿の再建は、朝廷が俊乗坊重源を東大寺の勧進職に任命し、各地から再建の費用を集めさせるなど、当時の日本の一大事業として進めました。

この事業を引き継いだのが源頼朝です。１１９５年の大仏殿落慶供養の際、頼朝は鎌倉から数万の軍勢を率いて警護にあたりました。頼朝が見守ったまぶしく輝く東大寺の屋根には伊良湖で焼かれた瓦があったのです。

●伊良湖東大寺瓦窯跡

市制施行10周年記念特別展

渥美窯 国宝を生んだその美と技

10月19日[土]～11月24日[日]

開館時間◎午前９時～午後５時（入館は午後４時30分まで）
休 館 日◎毎週月曜日（祝日の場合は翌平日）
会　　場◎田原市博物館
観 覧 料◎高校生以上：５００円　中学生以下：無料
主　　催◎田原市　中日新聞社

主な出品資料◎秋草文壺（国宝）、朝熊山経ヶ峰経塚出土品（国宝）、芦鷺文三耳壺（重文）、普門寺経塚出土品（重文）、平泉遺跡群出土品（重文）、小町塚経塚出土品（重文・重美）、短頸壺（山梨県指定）、一本松経塚出土灰釉壺（盛岡市指定）、鳳来寺鏡岩下遺跡出土品、史跡大アラコ古窯・伊良湖東大寺瓦窯跡出土品

▲灰釉壺

▶田原市博物館☎２２局１７２０

関連事業◎
【展示解説】
10月19日(土)午後１時～／10月20日(日)午前10時～
【ワークショップ】
「渥美焼のデザイン（押印文）」を写し取ろう
10月20日（日）午後1時30分～3時
・場所＝吉胡貝塚資料館
・参加料＝１００円（当日、受付にて）
【シンポジウム】11月２日（土）
【渥美窯の見学ツアー】11月３日（日）
【記念講演会】11月10日（日）
※関連事業の詳細は、広報たはらなどに掲載予定